

# 京那波屋系文人

井上隆明

近世初期の町人の夢は、一に俵・二階屋・三階蔵の京の街にあった。低い二階のオモテ造りの店舗と、色硝子に白塗り・象嵌飾りという三階座敷の構えは、さすが桃山文化を享けた京豪商のものらしく、逞しき造形意欲の象徴にみえたことだろう。

「諸木茂りて、三階蔵の白壁夕日移ろひ、皆内証はともあれ、蔵は長者の花といへり」(「本朝桜陰比事」二の五)の京洛商業都市のなかでも、上京とりわけ中京は八中京の分限者の腹はれ共V△三階蔵は長者の花Vで、豪勢な商家がひしめいていたはずだ。数字に強かった西鶴は、長者と分限者を、「銀五百貫目よりして是を分限といへり、千貫目のうへを長者とは云なり」(「日本永代蔵」一の一)と、明らかな分類を試みているが、その中京商人でも屈指の長者が、那波屋だった。(那波屋の所在地は未確認だが、

那波屋系の子孫、秋田市大町二丁目二番那波慎治氏の話では、京室町通りと聞いていた、という)

寛永四年の古い教訓的仮名草紙『長者教』に、京那波屋は三長者の一に数えられているというし、事実西鶴本にも名は表わされる。

薄鍋に醬油をはしらかし、日本一の御吸物ありと、那波屋なにかし恵美酒大黒をおろし、是にもなまぐさ物を焼立て、紙目はなるる時、是から杓子果報と、嵐が盛、(『好色二代男』一・貞享元)

六条の時無用の買論、大坂の法師の浪人にさし殺されしも、那波屋を見せ掛けて、野鉄砲うちしも、当らねばこそあれ、いせいにまかせて、我ままする事なかれと、(『同』)

幡州の網干に姨(をば)有しが、此許に遺はし置、「那波屋殿と云分限を見習へ」と、(『日本永代蔵』五・貞享5)

那波屋は三井(釘抜系)とも姻戚関係にあった富家で、わけても多くの学者文人を輩出した学問の家としても重視すべきだろう。那波活所(道田)木庵、魯堂、網川、祐英(蕉窓)祐長、葎宿、そして奥田尚斎と、元禄から化政にかけて、上方文苑で活躍した。交遊圏も伊藤坦庵、仁斎、東涯、古義堂エコール、三井秋

風、井原西鶴、江戸談林の操觚騷連から、諸国の筆文豊かな大名に結ばれる。

この那波屋系文人については、九州大中村幸彦教授『芭蕉と伊藤坦庵』（俳誌「かつらぎ」昭和32年3月号）と、学習院大小高敏郎教授『那波祐英の伝とその文事—元禄期町人文人の典型—』（国際基督教大学人文科学研究紀要二号・昭38）『那波祐英について』（『近世初期文壇の研究』明治書院・昭39）の先覚的開発があるが、人物の相互関係は不明で、「（祐英は）活所の族というが、正確な血縁関係は不明」（小高氏「那波祐英について」という現状だ。

たまたま、秋田市那波慎治氏、京都市東山区問屋町五条下ル三丁目西橋町柏原孫左衛門氏、および同市左京区吉田上大路町一九那波利貞氏宅に、那波系図が伝えられているのを知ったので、京那波屋系文人の青畚関係を解きほぐしてみたい。この論稿はひとえに、小高敏郎氏論文に示唆啓発され、執筆の動機となった。

秋田那波氏の系図は、祖那波三郎右衛門祐祥が元文中に、京都市下氏手代月岡瀬兵衛に依頼して、播州徳行寺他から資料収集して纏んだと、前書に記している。京都柏原氏のは、秋田と共通点をほとんど同じくし、祐英系の子孫祐隆が、明治初めに託したものであるという。

系図によると、姓を村上源氏に置き、村上帝の皇子具平親王を経て、その子右大臣師房になって源氏を称した。顯房、雅実、定房そして定忠から近江守師季の代になって堀川家を嗣ぐが、故あ

って播磨に配流された。流布本では師季・季方・季利・頼範（那波系図では頼則）となるが、那波系図は師季・季房・季則・頼則とつづく。季房の代に、播州佐用郡赤松郷に白旗城をきすき、家名を赤松氏とする。頼則から則景、家範と連り、久範にいたって、初めて赤松氏を公称した。

久範の孫（茂則の子）が、有名な円心赤松則村。拱美播三国の守護職で、建武中興で大功があり、のち叛して足利尊氏に随う。三子則祐は吉野三傑の一つで、護良親王擁護者で知られる。その子義則、孫滿祐・義維と、赤松氏の本流は延びるが、那波氏の祖は義則の弟国頼に分かれ、重氏、頼定、頼重、浄与、祐恵に流れ、那波氏を呼称するのだ。

祐恵は系図に、

天文元年壬辰生、称新兵衛、是時天下較平和以武与家之難。

於是移赤穂那波浦（註・相生市那波町）従事商業、始称那波氏。居二十年家富倉盈、其為人信而有慈、又繼父志奉仏以父取住小庵為寺、以浄恵為住僧。元龜三年掛鼓堂中、又讀本山本願寺創立古嶽徳行寺。娶田山河内守女生四男一女、後住姫路。慶長元丙申年二月二十七日卒、年六十五。葬徳行寺。法名祐恵。

妻田山氏。播州揖保郡真砂邑、堀山城主河内守女、生四男一女。慶長十年十一月二十四日卒。

とある。小高氏論文は、祐恵の代に京へ上って、富豪那波屋を築いたとされる。系図のうへでは祐恵上落は見当らない。以下、那波屋系文人を、便宜上、祐恵の三子つまり宗顯、徳由、宗且の三

グループに分けて述べてみよう。

### 那波宗顯グループ

宗顯 祐惠長男で、秋田系図は「葬書写山（京都那波氏系図に書写山塔頭仏乘院）慶安三年七月六日卒（同上系図に七十九歳）」で、姫路付近に埋葬されている。秋田系図には以下の記述を欠くが、京那波系図には、宗顯に三子あったとする。長男「新兵衛、住（姫路）平野町」次男「太郎左衛門、法名宗林」三男が江雲。京柏原家蔵那波系図では、長男「新兵衛、住姫路平野町。一代、テ絶エル」次男「太郎左衛門、教月宗田、住姫路二階町」となり、三男に変更があつて「又右衛門、住姫路竹田町、一代テ絶エル」となる。

ところで、姫路那波系図（那波利貞氏のご教示）になると、宗顯の子は四子で、新兵衛、太郎左衛門、三枝又右衛門、江雲の順だ。結局、姫路那波氏系図は「太郎左衛門、妻本田美濃守忠政内渡辺忠八女、法名心譽榮春、心光寺ニ葬ル」「三枝又右衛門、法名宗林」と、ある程度詳しいし、真実に近い記述のような気がする。

江雲 これまで出生の不明な那波系文人のひとりとされてい

る。『誹家大系図』の宗因の条に、

葎宿 那波氏、通名江雲、初名志好、樺軒ト号ス。又自葎翁

ト称ス。京師ノ人ナリ。季吟門弟ニシテ檀林ニ皈ス。

虎溪橋作者。

とあるから季吟門で、京都談林に属したことがわかる。延宝六年

（二六七八）に上落した田代松意を自宅に歓迎もした。

江戸より田代松意、俳道執行のためとて、はるばるのぼりて、京都の作者に残らず参会して、ある日知恩院の門前那波葎宿の庵に好人寄合、三吟三百韻取立、（『名残の友』三・元禄12）

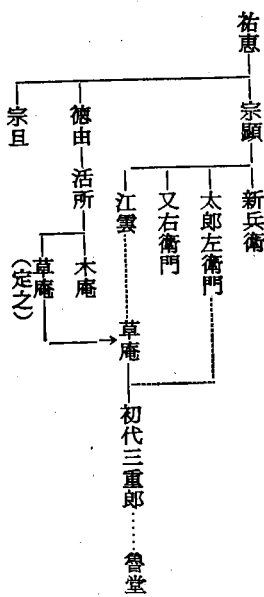
知恩院前のいおりで、松意・西鶴と三百韻の懷紙を巻き、また西鶴とは『何五百韻』をおこした。三吟三百韻は『虎溪の橋』天理市図書館蔵・稀書複製会本、定本西鶴全集10所収）として刊行された。同年二月中旬には、梅翁と『薪二百韻』（四人法師）連歌と俳諧3巻・昭和11年8月所収）の両吟を行ない、さらに十二月十六日にも『一時軒合次郎五百韻』（東大西竹文庫）を興行している。通称七郎左衛門と称した（俳諧大辞典）というが、系図に七郎左衛門を称した人は見あたらない。

問題なのは、江雲の死亡年だ。秋田・柏原系図には、江雲の名は見えない。別の方は「於江戸、明暦三丁酉歳（一六五七）正月十八日、大火死」（京那波）、「於江府明暦三酉正月十八日、大火死」（姫路那波）で、いずれも明暦江戸大火死亡とするのだ。西鶴らと動きを見せた延宝元禄より、だいぶ前の死没となるう。『誹家大系図』の通名江雲を信じようとするれば、他に江雲はいない。はたして、系図の江雲死亡年は誤記だろうか。ここで柏原家蔵系図を再度調べてみると、三男又右衛門の次に、女子二人を妹として記入している。複雑に考えると、どちらかの妹が婿つまり江雲を迎えたとも推定できよう。だが、死没年が気になる。とにかく、宗顯の子の分だけが、各系図とも記載が入り組んでいるこ

とに注意したい。

江雲の後半生になると、京那波・姫路那波とも記述が一致する。かれは徳由グループの活所次男定之(草庵)を養子に迎え、  
数代あとに魯堂・網川・奥田尚齋らの儒家群を生んでいく。

網川の曾孫が、現京大名普教授那波利貞氏(京那波系図)となるが、ここにまた一つ問題がひそんでいる。京那波系図の江雲一草庵(定之)―初代三重郎の系譜が、姫路那波系図では、太郎左衛門―初代三重郎―魯堂―網川と違ってくる。いずれにしても、ここでも江雲の存在は微妙なのだ。



### 那波徳由グループ

徳由 文人ではないが、のちの考証のために記しておく。祐恵の二男。秋田那波系図に「姫路元塩町住(京那波系図は恵美酒町住)、正保三戊午年十二月三日卒。葬同所魚町慈恩寺」とあるが、享年の記載はない。

活所 徳由の長子。秋田系図に「道四、名信之、号活所、称平八。惺窩先生門人、仕紀州侯。正保五戊子正月三日卒。享年五十四。洛陽恵日山東福寺中即宗院」で、文禄四年(一五九五)生れと分かる。師の藤原惺窩卒は、元和五年九月十二日だから、活所二十五歳のとき。近世朱子学の祖惺窩は、家康に経史を講説するほどの人物だし、門人林羅山の建議で、慶長十九年から校をひらき祭酒になる。活所は羅山・菅玄洞・堀正意(杏庵)・三宅亡羊・松永遐年(尺五)とともに、俊才とたわられる存在だった。

活所の所業は、『先哲叢談』『近世叢語』『近代名家著述目録』『事実文編』『南紀徳川史』や、青地礼幹編『可観小説』にくわしい。それらの記述をみると、名は方、のち瓢と改めた。父徳由が活所の良師友なきを憂い、京都銅駝坊に移った(『近世叢語』巻五・文政5)のが、上洛の動機らしい。活所が十七歳のときで、翌年惺窩に入門(『先哲叢談』文化13)した。

これは「活所の那波家がその祖父の代に、京都に進出したのは、豊臣秀吉が健在だった天正末から文禄を経、慶長の初年の交に遡るであろう」(小高「那波拙英について」)と違ってくるが、問題点は終章で分析しよう。

元和元年、京に出た家康に、活所は当時の名儒とともに召見される。二十九歳におよんで、肥後の加藤忠広に招かれ、寛永七年致仕し京に戻った。忠広妻が紀州徳川の出で、加藤家断絶後、生家にかえる。それに従って活所は(京那波系図)十一年に、紀州家に仕え禄五百石(『近世叢語』)をえた。四十歳のときだった。死没したのは、京銅駝坊の自邸(同)だ。

人君明暗図説、通称四書註音考、活所遺稿、活所備忘録、老圃集、帝王曆教図、白子文集の著作のほか、活字で私名類聚鈔も刊行している。東福寺即宗院の谷ふかきところに墓が現存し、「那波道田墓」の簡潔な碑銘。下部が渺し埋没しかけている。弟祐林は延宝四年一月十六日姫路卒。ほかに次弟朔庵、妹（平瀬氏室）がいた。

木庵 「名は守之、号老甫堂、初称小太郎、仕紀州侯而住京都。後改姓祐生、天和三年（一六八三）九月二十三日卒、七十歳（秋田系図）活所の長子で、『近世叢語』『鑒定便覧』『続諸家人物誌』『先哲叢談』によると、字元成、父の跡をついで紀州藩の文学を勤めた。老病を患ってから帰京し、自宅で教える。著書は老甫堂集。慶長十九年（一六一四）生れ。

木庵の長子元真是名正之、初名彦助、承応三年生れ。元禄十二年三月六日、四十六歳卒。孫如簡は名則之、初名孫一、中年に采女とあらため、享保二年八月七日、三十五歳卒。曾孫が林安となる。

草庵 活所の二子、木庵の次弟で、京那波氏系図だけに記載がある。本名定之で「平八定之、道田第二子、継那波江雲家」とあって、宗願の四男（？）江雲の養子となった。子どもは五人、長男又五郎は「住堅町」、次男惣四郎は早世、三男三重郎、長女は播州綱干佐々木弥三左衛門に嫁し、四男忠八は渡辺姓となった。跡をついだ三重郎（姫路系図では宗願二男太郎左衛門の跡を継ぐ）の次は、二代三重郎で、実は国府寺町三木又四郎の子、先代三重郎の娘の婿だ。二代三重郎の跡は、又次郎祐胤（宗求居士）、魯

堂とつづく。

魯堂 『先哲叢談』および西屋左大夫編「奥田元継筆記」に、小伝がみえる。従来の刊本解説に、活所の第二子とあるのは、おやまりになる。

魯堂曾祖名は定之、字は叔成、号は草庵、活所の第二子、木庵の同母弟なり。世々播州姫路に住す。父を祐胤と曰ふ。母は三木氏、少にして学を好む。年十七にして平安に遊び、岡竜洲に学ぶ。其塾に寓す。五年にして学識り、草堂を聖護院村に築き、（『先哲叢談』）

右の記述で祐胤の子とするのは正しいが、「曾祖父定之」は当らない。三重郎が二代続いたのを、一代としたためだろう。母を三木氏とすれば、祖父の出た家から迎えられたことになる。

姫路に誕生、京にあって儒者の名をあらわし、名師曾、初名与藏、字考卿、別号に鉄硯道人、主膳を通称とした。十七歳で上洛、岡白駒の塾に五年いてから、聖護院村で教授、程朱の理学をえてから古学を排した。このころの門人に、銅脈先生こと島中観齋がいたことに注意したい。聖護院宮の侍講もつとめた。洛撰で宋学を講ずるものは、渺なかったのだ。

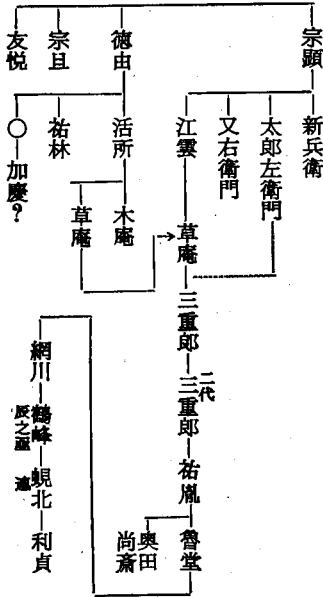
中世末に南学派を拓いた南村梅軒の故地・阿波に、晩年おもむいた。藩主蜂須賀氏に仕えて、八四国の正学と称される。表向き二百五十石、のち五十石加増、書物料として五十人扶持をえている。門人に「筆のすさび」の菅茶山がいた。寛政元年（一七八九）九月十一日、六十三歳卒。徳島城西妙高庵に葬られる。著書は、左伝標列、学問源流、道統問答、東遊篇、魯堂文集、校定左

伝集解など。

網川 「先哲叢談」「統諸家人物誌」「鑿定便覧」によると、旧姓佐々木、名は讓、字世勲、又は貫勲、号網川の儒者だ。魯堂養女に配されて、那波氏を嗣いだ。義父同様に、蜂須賀氏につかえ、文化十年（一八一三）七月二十五日五十七歳没、生れは宝曆七年（一七五七）となる。

奥田尚斎 京那波系図に、魯堂の弟として「平吉。奥田拙古。妻養姓」と述べる。名は元継、字志季、尚斎、松斎、仙楼の号。

「鑿定便覧」に、記載がある。竜洲岡太仲（白駒）についてことは、「奥田元継筆記」にくわしい。魯堂弟ゆえに、姫路生れだろう。妻奥田氏を継ぎ、大坂に住む。「享保二年に大坂三郎右衛門町住になっている。以後大阪出版書籍目録」では、享保二年に大坂三郎右衛門町住になっている。一般書の解説には活所の妻奥田氏を継ぐとするが、時代がちがう。増訂左伝評



林、左伝攷覽、左伝釈例稿、定本大学左右指南、滅麿燈、十二律考、赤城梅花記、両好余話、清詩選大成、仙楼文章の著がある。文化四年（一八〇七）八月七十九歳没で、享保十四年生れ。曾孫が前述の那波利貞氏だ。

加慶 『南紀徳川史』に、小伝がみられる。どの系図にも名はないが、活所の甥とされる。彼の手引きだろうか、紀州徳川頼宣に仕えた針医。気骨で知られ、かずかずの美談めいた逸話が残っている。

### 宗且グループ

徳由の弟宗且の系譜からも、祐英らの文人を出しているので、血縁関係をたぐってみよう。

宗且 秋田那波系図に「名満成号月海、寛永二十年（註・一六四三）十一月六日卒、六十八歳。葬大徳寺竜光院」とある。月海の号は、仏教帰依者のものだろうか。天正四年（一五七六）生。常有 「初名九郎左衛門、号大年、寛文四年（一六六四）甲辰

二月十九日卒、六十八歳。葬同所（註・竜光院）（秋田系図）だから、慶長二年（一五九七）生れになる。小高氏の考証は、祐英『祥鳳山直指庵建齋厨面堂記』の「大年居士建業之暇」からして、「常有は活所の祖父より遅れて上京、別個に商売としての家を興したとすべきだろう」と推定している。

しかし、常有父宗且の墓が竜光院にあって、しかも『町人考見録』（享保7?）に、「先祖は播州那波より出候。……親を常有といふ」と、先祖・親を二分した表記法を重視すれば、宗且系那

波屋の上落は、宗旦の時分と考えたい。宗旦・常有父子は、篤実の人らしく、家職に心を入れたゆえに、「親常有の時分七八十年以前は、京管武番の有徳者也」(町人考見録)と巨富をきずき、京の名家だったが、「七八十年以前は、解釈しかねるのだ。

素順 「名祐仏、号義山、称九郎左衛門。元禄十年(一六九七)丁丑十月十五日卒、享年六十五。葬同所(竜光院)」(系図)で、寛永十年(一六三三)生れ。

松斎 素順弟で、系図に「名祐竹、元禄五年六月十日卒」とあり、三右衛門、祐生、祐範、祐隆と子孫は続く。常有の築いた富も、素順・松斎兄弟の代になって、しだいに傾いていくことは、町人考見録の述べるところだ。堅実型の商人から、文化人型に移行していったためであらう。

親果て家を兄弟に分、素順は五六千貫目、正齋は貳参千貫目の身上と、其頃風聞致し候。……親果てより兩人の兄弟に早奢り出り、兄は小川二条上ル町にて、松平加賀守殿御屋舖を求めて大造の普請し、弟は小川三条上ル町仙台の御屋舖を求めて居住す。

所司代板倉内膳正は、兄弟の奢りを不届きとし、宇治橋の改修を命じる。京都大学野間光辰氏や小高氏の調べでは、寛文十年三月ころ着工、三年費して十二年正月に完工したという。富商に対する抑圧政策だ。

祐英 「称九郎左衛門。元禄十二年己卯五月二十七日卒、享年四十八。葬父塋域、法名古峯良鑑」(系図)で、承応元年(一六五二)生れ、木庵の長子元真と同年の一六九六年死亡だ。担庵ら

名儒と交わって漢詩文にあそび、蕉窓・芭蕉子・芭蕉亭主人の号から、蕪村このかた近年まで、俳人芭蕉と混同されていたこと、そして彼の事績などに関して、中村幸彦・小高敏郎両氏の研究に尽くされる。

祐英の子は、系図に女子(前田氏室、法名秀室寿珍)女子(早世)菊次(早世)女(三井昌房室、法名蓮誉榮薫)女(柏原氏室)一男四女が記されている。子運に恵まれず、家業と文壇のさなかにあった祐英には、人知れぬ苦悩があっただろう。

一方、系図では彼の兄弟関係は、鬼千代(早世)女(早世)女(法名元星素見)女(河井氏室)の五人弟妹だが、家系をたると、次のように複雑な変化をみせる。家系を承らえさせねばならぬ祐英の複雑な心理が投影していそうだ。

祐長 小高氏の『那波祐英について』の中に、元禄九年三月十四日、祐英を自宅に招いて、五律一首を詠ましめ、また伊藤仁齋・東涯父子、村上冬嶺、北村篤所、原芸庵、三浦養庵ら一流詞人と親交のあった端峰那波祐長なる人物が現われる。小高氏は祐長を「祐英の弟らしい」としたのは、肯綮に当たっている。

系図には祐英の跡継ぎとして、祐辰が出てくる。「実者祐伯(素順)三男」つまり祐英や早世した鬼千代の弟だ。祐英の周辺で祐長に該当するのは、祐辰の他にない。初名八郎左衛門、のち九郎左衛門と改めたから、本家つまり兄祐英の跡を享けたことになる。法名天嶺良潤、宝永七年(一七一〇)十二月十五日卒、享年は不明だ。祐辰が祐長の名を用いたのは、いつからだろうか。彼は、

素願跡は徳領九郎左衛門相統すといへども、はや其代身上も薄く成、是も早世し、其弟相統し、是も又早世し、(町人考見録)

の、ハ其弟Vということになる。徳領九郎左衛門は祐英だが、早世とするのは、稍々粗ッばい覺書のせいだろう。祐辰出生は、兄祐英誕生の承応元年(一六五二)から、後述の末弟常祐の生れた延享三年(一六八三)までの間で、七人兄妹だったと分かる。

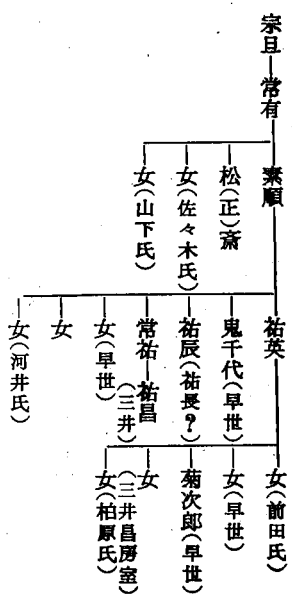
常祐 祐英・祐辰の跡は、常祐が受けつぐ。町人考見録によると、祐辰が「是も又早世し」たあと、「素願末子、新町通三条下ル町僧濃屋道喜方へ、幼年より養子に遣し置けるを取戻し、九郎左衛門と改名し、家督を継といへども、是又四十歳計にて果」てたとある。

系図は常祐を「実者祐伯(素願)四男」とし、初め藤村氏のち本家を継ぎ、享保八年(一七二二)一月二十九日四十一歳卒と記すので、考見録の四十歳計と合致しよう。生れは、天和三年(一六八三)と逆算できる。妻は祐林(活所弟・姫路)二男弥右衛門の女だった。

祐昌 常祐が「四十歳計にて果」てたのち、最早家を継可申ものも無之処、元来三井浄貞(北家三井の祖高利の長兄俊次で、釘坂三井の祖)三代目三郎左衛門(盛房)は、那波屋掣也。彼娘に出生の伴四代目三郎右衛門是也。幸弟有之を那波屋へ引取、素願五代目の九郎左衛門是也。(町人考見録)

のように、四代目三井三郎右衛門の弟が、入籍してくる。これを

那波系図に照らすと、祐昌に当てはまり、「実者三井昌房嫡男」となろう。昌房妻は、系図で祐英三女と判明できた。



那波屋重右衛門 天明元年、大坂木挽町中之丁吉文字屋市兵衛から、『諸国怪談実記』五冊を出した人。天明六年に二編五冊で再板した。『享保大阪出版書籍目録』に、播磨佐用の人とある。宗願系か、松(正)斎系の人物だろうか。

かような栄誉文書の系譜をたどってきた那波家も、徳由グループは他国に出、宗且グループは松(正)斎そして祐昌の代に、大名貸しでそれぞれ没落したことは、考見録などで明らかだ。祐昌系は祐英の末女の婚家・富商柏原氏に身を寄せたまま、明治九年一月十八日に祐隆没で絶えてしまう。祐隆は祐英から教えて八代目だった。なお柏原家は六人も那波家と交流があり、祐隆弟貞三郎も柏原氏を嗣いでいた。



一方、秋田那波氏は、宗且弟友悦（初名三右衛門、号幸斎、寛永十七年九月十八日卒、五十九。秋田系図には通称三郎右衛門）—宗恩（初名助右衛門、又の名幸次、号生寂斎、元和三年卒）—久誠（京阿尼院碑文は久誠、秋田系図が久成。初名次郎左衛門、又の名幸頭、元禄七年卒、五十）—三郎四郎（延宝四年七月四日卒、十二）弟祐祥（異母弟、天和二年十一月十九日、生洛菊水鉢町、称三郎右衛門、中年住羽州秋田城）の祐祥を祖とする。ただし、京系図では、闕祥の文字を当てている。

彼は京室町恵比須通りで、油屋を営んでいた。大坂の役に出陣した秋田佐竹氏らに、富商山下氏の勧めで資金を貸し、返済されないため、没落しはじめた。加えて、宝永五年（一七〇八）三月八日の大火で焼失し、佐竹氏の招きもあって秋田に土着した。

「妻を離縁し、代々番頭と二人で江戸を回って、北に来たほどの困窮だったという」（那波慎治氏談）が、御用達商人として資産を積み、城下第一の精緻り物商工業者となり、素封をもって聞こえ、いまだに健在だ。ちなみに、秋田那波屋は家紋左頭三ツ巴、屋号は一鱗の印で升屋（播州時代の地名という）だ。

### 那波屋上洛の時代

これまで、京那波屋文人の縁族関係を調べてみたが、疑問に残るのは、京進出の時代だ。第一の徳由グループは、祐恵の次男・那波徳由の代とみたい。

播州姫路人也（中略）慶長庚戌、先生辞親来洛、調藤公行弟子礼、藤公一見奇之、接待驗他、与其徒林道春・堀正意・菅

玄同等、往復待坐、憤排不已、嘗賦杜鵑詩、有相喚不成群句、一時流輩多疑識者、先生固執不変、規之藤公、藤公遂許可焉。（奥田舒雲『祐先生行状』）

舒雲は活所門人で、慶安元年（一六四八）の筆だ。彼は師を姫路の人とし、慶長十五年庚戌、活所十六歳で上京、藤原惺窩の教えをうけた、と述べる。だが、舒雲の文には、疑点が二つある。

「慶長庚戌」と「辞親来洛」だ。この点を追ってみよう。

余年十八、見北肉山人。明年春作杜鵑詩、〔活所備忘録〕寛政？）

写本だが、日比谷図書館加賀文庫にある活所の著だ。彼は惺窩入門を十八歳と記憶する。そして、さらに一書。

年十七にして京に入り、次年弟子の礼を取りて、惺窩に謁し、〔先哲叢談〕文化13）

十七歳で姫路を出て、十八歳で師事したとすれば、その間一年、奈辺に住んでいたのだろうか。実は活所は、

播磨姫路人（中略）父徳由奇之欲成其器使縱其取欲、以僻地無師友資、為卜居京師銅駝坊、於是活所仍縱学無不観、〔近世叢語〕卷五・文政5）

とあるように、父徳由と共に、洛中に定着したとみてはよくないか。

ただし、活所の祖父祐恵は播州德行寺、伯父宗願は姫路郊外書写山、父徳由も姫路慈恩寺で、京洛東福寺即宗院を菩提寺としたのは、活所の代からだった。祖父祐恵が一移赤穂郡那波浦、事従商業、始称那波氏……後住姫路」（系図）で、すでに商人になっ

ていたし、洛中のほかに故郷姫路にも店を持っていたか、または故郷に骨を埋めた——とも考えられる。

第二の宗且グループは、どうだろうか。小高氏は宗且の長子落有の代とされる。が、父宗且は名刹名僧への入信者めいた月海の号を持ち、大徳寺童光院に葬られ、寛永二十年六十八歳まで生存している。しかも寛永十三年に大徳寺に一切経の経蔵を寄進している事実からして、宗且上洛を採りたい。常有また仏堂を献じている。

宗且そして徳由・活所の二グループのほかに、姫路那波屋の第三波として宗且弟・友悦系が、京に進出してきた。友悦は幸斎と号し、寛永十七年九月十八日五十九歳で死亡、播州徳行寺に埋葬された。

京都那波系図には、友悦項に「子孫往洛」と付記し、妻妙悦（津田氏女・号感養）の墓は「承応元年壬辰五月九日卒、享年五十七、葬洛北浄善寺。元禄七年甲戌、有故遷塔于東山阿足院。註・建仁寺別院」と述べる。また阿足院の友悦・妙悦の碑文には、「府君壯年買家宅於京城、俾監以守且使舅宗恩与予遷居子維陽、於是府君遷来」とあり、友悦系の上京は、嗣子宗恩の代とみてよいだろう。

「智恵才覚を以てかせぎ出」（世間胸算用）した商人も、「近年大名借致候者、将棋倒しの様に成行」（町人考見録）き、「京都の名ある町人、二代三代にて家を潰し、跡方なく成行事」（同）となった。まことに「分限は才覚に仕合手伝では成がたし」（日本永代蔵・三の四）だ。大名権力と町人財力の相互関係のバランスが崩れたとき、名ある町人の影も消えるのだ。

ことに元禄期ののちは、貸し金回収が思うにまかせず、大名の債務破棄・お断わりが一方的に実施され、（お断わり）「京商人」たちの倒壊がめだつ。松斎・祐英系那波屋も、その例外ではなかった。そして同時に、京町人史に、特異な光芒を放った、この文誉の家の名も消滅していく。

#### 新刊紹介

鶴月洋著

#### 『広告文の歴史—キヤッチフレーズの一〇〇年』

本書の広告文には「戯作者からコピーライターまで——平賀源内に始まり、馬琴、三馬から文豪蘭外、漱石まで、さまざまに人々が手を染めた広告文の歴史と作法」とある。故鶴月洋氏のあずかり知広らぬこの広告文に氏はあの世で苦笑されているかもしれないが、「生活様式が変化し、複雑化するとともに、全く無教といつてもいいほどに生まれてはまた消えていった」（P11）広告媒体とそこで用いられている広告文の歴史を、氏の中広い学識と読み易い文章で興味深く解説してくれるのが本書である。とまれ「欧米のマスコミ理論やコマーシャル文を知ることでも大切であるが、なんといつても日本では日本語で効果をあげなくてはならない。その点、江戸、明治、大正、昭和の現代まで、各時代の広告文の発想と実体を説き明したこの書は、格好の参考書になるだろう。」（輝峻教授「はしがき」より）（日経新書・224頁二四〇円）